

第5学年 社会科指導案

南風原町立南風原小学校 屋良真弓

1. 単元名

米づくりのさかんな地域

2. 単元目標

- ・我が国の稲作が、自然条件を生かして営まれていることや、その生産に関わる人々の工夫や努力によって支えられていることを理解するとともに、地図帳や統計などの各種の基礎的資料を通して、情報を適切に調べまとめる技能を身に付けるようにする。(知識及び技能)
- ・稲作に関わる人々の働きを多角的に考える力、稲作に関わる課題を把握して、これからの稲作の発展について考える力、考えたことを説明する力を養う。(思考力、判断力、表現力等)
- ・我が国の稲作について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の産業の発展を願い我が国の将来を担う国民としての自覚を養う。(学びに向かう力、人間性等)

3. 単元の評価規準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に取り組む態度
子どもの姿	社会的事象の地理的環境や歴史的経緯、仕組みや働き等について調べの中で、自分とそれらに関わる人々とのつながりに気づき、まとめることを通して社会生活について理解する子ども	社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に捉え、仲間との対話を通して社会に見られる諸課題について考えを深め、考えたことをもとに選択・判断し、適切に表現する子ども	学んだことをもとに、自己の生活や在り方をふり返し、見つめ直すことを通して、持続可能な社会の形成に向けて主体的に問題を解決しようとする子ども
評価規準	①稲の種類や分布、生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用、生産量の変化などについて、地図帳や統計などで調べの中で、自分とそれらにかかわる人々のつながり気づき、必要な情報を集め、読み取り、稲作の概要や稲作に関わる人々の工夫や努力を理解している。 ②調べたことを文や表などにまとめ、稲作は自然条件を生かして営まれていることや、稲作に関わる人々は生産性や品質を高めるよう努力したり輸送方法や販売方法を工夫したりして、良質な食料を消費地に届けるなど、食料生産を支えていることを理解している。	①稲の種類や分布、生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用、生産量の変化などに着目して、問いを見だし、稲作の概要や稲作に関わる人々の工夫や努力について考え表現している。 ②稲作の変化と稲作に関わる人々の工夫や努力とを関連づけて、多角的に捉え、仲間との対話を通して、それらの人々の働きを考えたり、学習したことをもとにこれからの稲作の発展について考えたりして、適切に表現している。	①我が国の稲作について、予想や学習計画を立てたり、見直したりして、持続可能な社会の形成に向けて、主体的に学習問題を追究し、解決しようとしている。 ②学習したことをもとにこれからの稲作の発展について考えようとしている。

4. 単元について

(1) 教材観

本小単元は、新学習指導要領の第5学年の目標及び内容(2)を受け、設定したものである。

ア 次のような知識及び技能を身に付けること。

(ア) 我が国の食料生産は、自然条件を生かして営まれていることや、国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを理解すること。

(イ) 食料生産に関わる人々は、生産性や品質を高めるよう努力したり輸送方法や販売方法を工夫したりして、良質な食料を消費地に届けるなど、食料生産を支えていることを理解すること。

(ウ) 地図帳や地球儀、各種の資料で調べ、まとめること。

イ 次のような思考力、判断力、表現力等を身に付けること。

(ア) 生産物の種類や分布、生産量の変化、輸入など外国との関わりなどに着目して、食料生産の概要を捉え、食料生産が国民生活に果たす役割を考え、表現すること。

(イ) 生産の工程、人々の協力関係、技術の向上、輸送、価格や費用などに着目して、食料生産に関わる人々の工夫や努力を捉え、その働きを考え、表現すること。

わたしたちが日頃食べている米は、農業に関わる人々の様々な工夫や努力によって届けられている。品種改良や生産の効率を高めるための技術の改良、味の向上や安全確保などの工夫や努力が行われているおかげで、新鮮で良質な米が生産されている。しかし、現在、農業を取り巻く現状は、国民の食生活の変化による米の消費量の減少や農業従事者の高齢化などに伴う生産量の減少といった問題を抱えており、厳しい状況にあると言える。そのような状況の中で、様々な課題を解決するために、農業に関わる人々は様々な工夫や努力を行っている。本小単元では、日本人の主食である米の生産について、農業に関わる人々が新鮮で良質な米を生産し、消費地へ届ける工夫や努力をしていることを調べることを通して、農業が、国民の食料を確保する重要な役割を果たしていることを考えるようにすることをねらいとしている。また、沖縄(伊是名島)の稲作の様子を学び、新潟(南魚沼)のそれと比較することを通して、その土地の地形や気候など自然条件を生かし生産性を高める工夫をしていることについて考えさせることにつながると考え、本単元を設定した。

(2) 児童観

家族や親戚が米作りをしている児童はおらず、日常的に農業と関わりを持っている児童は少ないことが推測される。米作りの仕事についても、経験したことがある児童はほとんどおらず、米作りについての知識も田植え、収穫など、作業を表す用語で答えたものが多く、具体的な作業の内容について理解している児童は少なかった。沖縄で稲作が行われていることを知らない児童も多い。

(3) 指導観

指導に当たっては、「学習問題をつかむ」過程で、教科書の写真から新潟県南魚沼市で米作りが盛んなことに気付かせ、学習問題を児童の声をつなぎながら設定する。また、単元のゴールとしてのパフォーマンス課題を提示する。学習問題を解決し、パフォーマンス課題である「米作り CM」を作成するためには、よりよい米作りのための工夫や努力、米の種類や値段、輸送などについて調べる必要があることに気付かせたい。

「調べる」過程では、農業が盛んな土地の特色や自然条件、農業に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸の働きなどを中心に、教科書や資料集、地図帳などの資料を基に調べる活動を行わせる。調べる活動を行う際、資料の文章量やグラフの数などが多いときには、使用する資料を指定したり、限定したりすることで、調べる活動が苦手な児童に対する手立てとしたい。また、農業に関する具体的な事実を羅列的に調べることに留まらないようにするために、「どのような工夫を何のために行っているか」について考えさせることを通して、事実をまとめ、知識を相互に関連付けることができるようにしたい。さらに、沖縄(伊是名島)の稲作資料を活用する

ことで、稲作に関わる人々の働きや稲作農家を取り巻く課題、これからの稲作の発展について、教科書と自地域の稲作について往還的に学べるよう手立てを講じる。毎時間、単元のゴール（パフォーマンス課題）を意識させることで、単元を通して、知識を相互に関連付け、米作りについての理解を深めることができるようにしたい。

「考え・まとめる」過程では、これまでのノートや OPP シートの記述を振り返らせる。農業が盛んな土地の特色や自然条件や農業に従事している人々の工夫や努力、生産地と消費地を結ぶ運輸の働きなどの内容など既習を踏まえ、これからの稲作の発展について思考、表現したパフォーマンス課題に取り組みさせる。

(4) この題材で働かせる ESD の視点（見方・考え方）

- ・相互性・・・稲作農家の工夫や努力、課題は、私たちの食生活と密接に関連している。
- ・連携性・・・家族や身近な人たちと、稲作が抱える問題について知っていることを共有することが大切
- ・責任性・・・私たちが行動を変えていくことが何よりも大切であること。

(5) この学習を通して育てたい ESD の資質・能力

・批判的に考える力（クリティカル・シンキング）

生産者や環境にも配慮した生産活動をしているか、自分の生活を見つめ直す。

・多面的・総合的に考える力（システムズ・シンキング）

「地域の米作り」「全国版（教科書）の米作りについて、比較しながら考える。

・コミュニケーションを行う力

身近な問題について、「米作り CM」を作成。自分が決めた相手に伝える。

・つながりを尊重する態度

身近な問題は、地球規模の課題と密接に関わっているので、自分たちが変えていかなければならない。

(6) この学習を通して育てたい ESD の価値観

- ・世代内の公正
- ・自然環境や生態系保全を重視する
- ・幸福感を大切にす

(7) 達成が期待される SDGs

目標 11 まちづくり

目標 13 気候変動（地産地消の面から）



5. 単元指導計画

時間	主な問い	□主な学習活動	・資料
1・2 (つかむ)	私たちが食べているものは、どこから来ているのだろう。	<input type="checkbox"/> 給食の写真から使われている材料（食材）を挙げる <input type="checkbox"/> 献立表を見て、給食には色々な食材が使われていることに気づく。 <input type="checkbox"/> 「じゃがいも」を例に挙げ、農作物と気候は大きな関係があることを想起する。 <input type="checkbox"/> 拡大した日本地図に給食で使われている食材を生産量ごとに書き込み、日本各地から食材が届いていることに気づく <input type="checkbox"/> 米の消費量が減っていることに着目し、その原因を予想する。	・給食献立 ・給食の写真 ・日本地図 ・主な食料の消費量の変化グラフ
	学習問題を作ろう	<input type="checkbox"/> 実際に稲穂や米を触り、疑問に思ったことを出し合う。 <input type="checkbox"/> 農業の就労人口が減っているグラフ、米の作付面積の変化（減少）のグラフの 2 つを関連付けて読み取り、米づくりについて予想する。 <input type="checkbox"/> 単元を通して、調べてみたいことを挙げる。	・稲穂 ・グラフ(2つ)

3. 4. 5. 6. 7. 8. 9. 10. (調べる)	「米作りが盛んなのはどこだろう」(ななほ)	<input type="checkbox"/> 米づくりが盛んな地域について、米袋マップを発端に教科書などから読み取る。 <input type="checkbox"/> 稲作が盛んな地域の気候とおいしい米ができる条件について予想する。 <input type="checkbox"/> 沖縄の米づくりについて考える。	・教科書、資料集 ・米袋マップ
	「米はどのように作られているのだろう」	<input type="checkbox"/> 教科書の資料をもとに、南魚沼市の様子(気候や土地の様子)を読み取る。 <input type="checkbox"/> 米づくりの行程について知る。	・教科書、資料集
	「米作りは水田でどんな工夫がされているのだろう」(きょうた)	<input type="checkbox"/> 米づくりの工夫(合鴨農法・黒酢散布など)について、教科書や資料集から読み取る。	・教科書、資料集
	「いい米にするためには、どうしたらいいのだろう」(児童からの問い) ↓ 「昔より、時間をかけずに多くの米がとれるようになったのは、なぜだろう」	<input type="checkbox"/> 米づくりの工夫(耕地整備など)について、今と昔の様子を比較しながら、資料を読み取る。	・教科書、資料集
	「米作り、今は機械でやっていると思う(予想)」(児童からの問い)	<input type="checkbox"/> 水田にある米がどのような過程を経て、自分たちの食卓に届くのか、教科書資料を用いて調べる。	・教科書、資料集
	(米の作付面積が減っている資料を見て) 「米作りをしていた人たちが、米作りをあきらめた(予想)」(児童からの問い) ↓ 「なぜ、米作り農家さんは、米を作らず別のものを作ることにしたのだろう」 ↓ 「米づくり農家さんをとりまく課題は?」	<input type="checkbox"/> 教科書(資料集)の統計資料から、稲作農家を取り巻く課題について読み取る。	・教科書、資料集
	「日本の“ふっくらほかほかのおいしい米”を残すために、何が大切なんだろう」(児童からの問い)	<input type="checkbox"/> 稲作農家を取り巻く課題を踏まえ、これからの米づくりについての立場を決める。 <input type="checkbox"/> 日本の米を残すために大切なことを挙げ、ランキングワークショップを通して、米づくりの発展について考える。	・教科書、資料集
	「米作りに関わる人たちは、どのように課題に向き合い、どのような取り組みをしているのだろう」	<input type="checkbox"/> 「米の消費量を増やす」「農家数を増やす」2つの視点で資料を読み、課題解決の取り組みを探る。	・教科書、資料集
11. 12. 13. (考え・まとめる)	「これからの沖縄の米作りはどうなるのか考えてみよう」	<input type="checkbox"/> 東江さんの米づくりと教科書の米づくりを「自然条件」「生産者」「消費者」の三つの視点で比較し、相違点を考える。 <input type="checkbox"/> これからの沖縄の米づくりのあり方について考える。 <input type="checkbox"/> 米づくり CM に必要な材料(既習事項)と発信先(相手意識)を確認する。	・金武町の稲作の写真・動画 ・東江さんの米づくりについての資料(伊是名の米づくり) ・教科書、ノート、OPPシート等
	「これからの沖縄の米作りをどうしていけばいいのだろう」 ↓ 「今まで頑張っていた人たち(の努力、お金、時間が)無駄になりそう」(児童からの問い)		
ESDの視点(見方・考え方)を働かせる発問 ・相互性・・・「東江さんは、どのような事を大切にしながら米作りをしてるのだろう」 「沖縄の稲作と私たちの生活はどこでつながっているだろう。」 歴史や水をキーワードにして考えてみよう ・連携性・責任性・・・「沖縄の米の生産量を増やすために、自分に何が出来るだろう?」			
	「米づくり CM (パフォーマンス課題)を作ろう」	<input type="checkbox"/> これまでの学習を振り返り、パフォーマンス課題に取り組む	・教科書、ノート、OPPシート等 ・タブレット端末

豊かな水と大地、尚門王も育てた伊是名米
～米農家 東江 恵一郎～

今ではあまり想像できませんが、沖縄県でも昭和40年ごろまでは、どの家庭も稲作を行い、サトウキビ畑よりも水田の方が多かったのです。沖縄県の稲作の始まりは、8世紀～10世紀ごろに中国から稲作が伝わり、日本が平安時代になるころ、集落を形成し、按司(あじ)が各地を統めるようになりました。そして、争いがくり返され、グスマク時代へ移っていきます。このように、日本の歴史と同じように、稲作の伝来が現代の私たちの社会の形成に大きく影響しているのです。

先島		10世紀				17世紀	
先島先史時代 (4500～3500年前)		縄文時代 (古期)		古墳時代 (古期)		近世 琉球	
沖縄 本島	旧石器時代 (新期)	弥生時代	古墳時代	飛鳥・奈良時代	鎌倉時代	室町～戦国時代	江戸時代
北琉球	縄文時代	縄文時代	縄文時代	縄文時代	縄文時代	縄文時代	縄文時代
	1万6000年前	3000年前	1400年前	800年前	150年前		

〈伊是名の稲作の現状〉

沖縄で、現在お米の生産を続けている場所がいくつかあります。羽地、石垣島、伊是名島、伊平屋島、与那国島などです。そのなかでも今回は、伊是名島のお米作りについて、お米農家の東江恵一郎さんを紹介します。伊是名島では、昔からお米作りが盛んな島でした。1970年頃に生産調整が行われるまで、どの家庭も自分が食べる分のお米を作っていました。小さな頃から家の手伝いは、お米作りや野菜、牛や豚、ヤギ、アヒルの飼育など、たくさんあったそうです。生産調整が行われると、当時550haあった畑のうち、今は50haの水田しか残っていません。ほとんどが、当時単価が高かったサトウキビに変わりました。沖縄県全体でも同じです。(なぜ、生産調整が行われたか、サトウキビなのかは調べて欲しいです。)現在、米農家は15人ですが、50haを15人でわると平均で3haです。結構な広さです。50haという水田の広さは、島民2000人が一年で消費する量を計算したものです。

大変なのは、これだけの水田を一人で管理すると、最近本土の方で行われている共同で農機を使うことができません。自分で田植え機やコンバインなどを購入する必要があります。そうしないと、お米を植えたり、刈り入れたりする期間に間に合いません。ですから、機械を購入したりする自由が大きく後継者や新規参入なども難しい現状があります。

伊是名のお米は、生産調整により、5kg2300円で現在売られています。実は、農家も自分で作ったお米を精米してもらい、売店などで自分で買います。ですので、農家だからといってお米が食への課題ではなく、他の県のお米を食べるのがほとんどです。伊是名の人はお礼やお土産にお米を使います。ですので、島民2000人分を計算されたお米のほとんどは、島外で美味しく食べられているのかもしれないです。



〈伊是名のお米作り〉

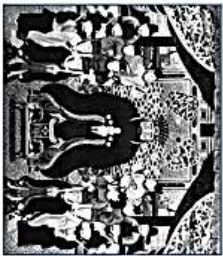
伊是名のお米も、石垣と同じように二期作です。一期目は、1月にもみまき。2月から3月に田植え。6月頃に収穫となります。二期目は、7月にもみまき、8月に田植え、11月に収穫となります。

伊是名島では、昔から湧き水などが豊富でした。それにくわえ、おそらく沖縄の離島で一番くらいに農業用の貯水池があります。貯水池の数が多いのは、それだけ昔は、どこでも稲作が行われていた証でもあります。さらに、2008年(平成20年)に出来た、千原地下ダムのお陰で、農業用の水源が安定しています。現在の米の品種は「ひとめぼれ」です。お米がふっくらとしておいしいです。また、新米として認められ、収穫したての新米な味わいも伊是名のお米の魅力です。



〈尚門王とお米〉

琉球の第二尚氏王統の初代国王となった尚門も伊是名島で生まれ、稲作と関係のある言い伝えが残っています。尚門の青年時代の名を金丸といい、金丸は東江さんの畑の近くにある「逆田」という名前の田んぼを営んでいました。「逆田の」由来は、雨のない日照りの年でも水がたえることがなかったために、「下から水をくみ上げた、逆さにした」というのが由来です。当時、働き者の金丸であったが、田んぼの水がたえることがないので、島民から水どるぼうの浮名をきせられて、島から追い出されています。その結果、沖縄本島で認められ、琉球の国王にまで上りつめることとなりました。



写真左 尚門王。写真真ん中は逆田の様子。一番上に湧き水があり、水が枯れることがない。
写真右は、毎年恒例の小学生の稲作体験。

【成果と課題】

- 沖縄における稲作の自作教材(地域教材)を活用したことで、子どもたちが自分事として稲作を捉えることが出来た。
- 教科書の内容(南魚沼の米作り)と地域の内容(沖縄の米作り)を往還させながら学習を進めたことで、ESDの視点を存分に働かせながら稲作(農業)について考えることが出来た。
- 総合的な学習の時間(テーマ:SDGs)とつなげながら学習を進めたことで、批判的に考える力(クリティカルシンキング)を身に付けることにつながった。
→教科における資質能と併せて、ESDの資質能力を身に付ける場の設定。

- 地域教材の活用が不十分であった。
→解決策:ESDの視点を教師側が明確に持ち、それを働かせるような明確な発問を組み込んでいくこと。
- 地域教材がサブ的な位置づけであったため、学ぶ時間が少なかった。
→学習の基点を“地域教材”と位置付け、地域教材をメインで学習を進めていく。そうすることで、更に児童らが自分事として学び進めていこう。